



重修真書太閤記

五編
六

13
459
46



持 18
5
459
46

福

重修真書太閤記五編卷之拾六

信長公播州下向御延引之事

并羽柴筑前守信忠卿諫言の事

上月表熊見川に於て上方勢と中國勢と不時に闘
争起り雙方既ニ五万余りの軍勢掛合をの事あり
今日を以て兩陣有無の合戦あるへるを見
處に敵味方互に實をさげ虚を討んと其隙を伺ひ
大戦を慎むける上秀吉旗本を以て中國勢を追却
けあまつるに福島市松中國勢南條小鴨の郎等末
石彌太郎を討捕て高名と元來吉川小早

同
會
攻
印

川軍と纏めて手早く引揚んと詮とありしゆ
福島踏止めて戦を挑めども是を支えんとおも
心の儘は末石首を取らるる筑前守本陣
帰て今日の始末を注進とんと諸士を集めて詮儀
あしげらふ氏家う手の者馬を冷し熊見川へ下
立し事起る中国勢と闘諍と起し鉄炮と合
して手負五六人及ひしりら氏家ららくは加勢
して中国衆を追靡し中国衆の内よりも加勢
の者出来り故佐久間龍川あはれ人数を操出
し打合切合しげらふ中国衆より追くみ出来り
まとも吉川小早川元ら闘諍を静むると以て至

いあり更ふ合戦と好まぬ然とも筑前守村重を
とらめて佐久間龍川を援させんとあしげらふ村
重より強て戦ふことを好まぬ筑前守諸將の進退を
見て其氣勢を察し一々ふらと記して安土へ脚
かを走らして言上あしげらふ信長も村重も心
變のありと知とあし筑前守穂便より是を保護
あし急な事を發せざる様にあととべし由を仰下
きたる然とも村重も熊見川よりの景氣とあ
しとあしめゆのをも多らうげらふ誰ともしれを村
重陣の前よ
荒木弓らうまの方へ押寄て射も射らとと引も

引とて
 と筆太ふ記して建たうけり筑前守川く思ひけ
 らる今日中将殿らふ御座またらんよ此闘
 諍もこのまうにていこと治ますくその上は諸將
 の景氣もと色くふ賞罰あつていあるべうらひよく
 ぞ中将殿の御出あうらうと心の中み思ひしを
 う此時安土よてい播州の消息を聞食出馬あるべ
 しとてその催度々よ及ひ一処五月雨あさうふ降
 出昨日を今日も小止とび晴まも見えぬ空う
 や月見は月の名ととめてあのみる人の泣涙霈霖
 ふふとい山々の柴樺出と時ととて谷の小川の水

増て宇治の川浪いさようらよるへの岸も見つと
 うは八十氏人のさう下は槇の鳴船勿々道絶
 とて宿老の面々御出をととめ奉とい信長も強
 てとも仰出ささうと一日くと延引しけるうち
 ふ羽柴筑前守らう委細の注進状を奉りけるあ
 う毛利三家の出勢全く尼子兄弟と討んる為あ
 て織田家と威を競らん為あうぬといめく明白
 聞へその上は鞆の津の容子もたうらふ知し
 ら昔大内義興の義植將軍と助け参らとしく如く毛
 利三家の人々一味同心よ義昭將軍と補佐して上
 洛と企川るあうんとの爲てあめひ疑念たちよ

ちふ晴しむとふ然らひ信長下向その詮かりあへ
 播州進發の遅滞及ひける中將信忠の
 許より飛脚で進上とらと羽柴筑前守の言上の
 趣と猶よ操返し注進とらと御出馬延引ありて
 然るべしとの由ありとの外惟任光秀佐久間信盛
 の注進状もさる同趣とて御進發及ひひや
 と申上げると松井友閑武井夕庵西法印御側より
 必竟西國へ羽柴筑前守と差下さることを彼頼ふま
 じの義昭將軍の上洛を謀らるゝと守喜多吉
 見その外の大名家義昭將軍と馳走とるゝ毛利三
 家の義昭將軍のさめ忠節と竭さんと計るゝや否

と云とと弟一少探と索めん慮めて仰付らとて
 あふ如斯明白ふ中國大名の心中も毛利三家の意
 趣も委細ふ御耳ふ入るゝ何の御機遣ひも
 あることよ此上の諸國のつとも御名代めて静謐
 仕るゝくひ龍の遠國まで御馬を出さるゝことか
 らあど申上しうい遂に西國下向を止めおひけり
 流布本秀吉毛利と戦ひを欲されとも勢少さる
 故ふ安土に言上して兵を請既にして加勢の兵
 一ハ叛心を懐く村重其餘ハ嫉妬偏執の瀧川佐
 久間あるを以て熊見川の合戦秀吉の本意を達
 せびその上光秀計て信忠の上月出馬を止め不

どんと軍の大機とらづ。又信忠使と安土に進
 と信長の出馬を止めて信長を以て一生を誤ら
 しめ永る弓矢の耻辱を遺る。記を以て毛利の
 兵と發せし趣意上月の城を抜て佐用の地を復
 する。主とを以て尼子兄弟及び山中立原を失く
 ざるを以て急とざることを知さる。漫筆
 を取て筑前守とよひ總見公の英烈を害は
 む。つこのらめらる。故に諸書
 小因て其深意を求め此条を刪正を
 安土より再び筑前守の許へ使者を以て上月表
 對陣して徒日と費を以て益あること云へ。早

早引拂ひ書寫山本陣へ歸りその勢を以て神吉志
 賀田兩城を落し三本の別処を制する。由を仰下
 すと中将信忠のめとつても同く是を下知さる。と
 けるよより信忠より筑前守并佐久間瀧川の
 めへ觸らるとし秀吉大に驚さる。何か
 不御趣意より中國勢十萬ふ餘りて出陣し味方も
 まる對々の勢を以て是を打て出ゆ。一度も
 戦を挑まば勝敗の機を顯らる。及ら兵を引甲
 を纏めて遠く退うんと弓箭取身の耻辱といふべ
 しめく。此後何とて中國に向ふて合戦をい
 たり。ゆゑんや此まゝにて退陣ゆらも残念存

そと云い使者何さま筑州の仰らるる処その理あ
う但委碎へ安土より中将殿へ御書の参うてゆく
るその御書みゆを書けりて中ことゆまをさうめ
と答けるまより筑前守その使とりの中將殿の
本陣鎧磨へ伺公し上月の陣を拂ふて別所を討と
の御使うこまうてゆ但あふといふ御事よて左
様ふ火急は仰下ことしやらん具さぬ中承らるる
やと存して参上仕うゆとやけとい信忠宜ふ様別
み子細あるまあり中国勢三年も長陣とんと用
意よて出張と聞う故みゆ然らぬ此方よて
池後安く對陣とんため三木と打落し東播とくと

平均してゆめく毛利ふ向ひゆつこの御下知あり
と仰らるるまより秀吉然らぬ上月ふ籠うゆ尼
子兄弟をさうめ山中立原あんと捨殺しやとこふ
てゆめあまうみ痛らるる事みゆらばや君より今
一度安土へ仰上らぬ大殿の御下向へあくとも今
暫時上月表ふ御勢と残さぬ彼兄弟を助けられ
るとんこと弓矢神の照覧もゆへ真實の御義ありと存
ゆと諫めしうとも信忠得心あくいつとも大殿
の御下知の如く早々當処へ参らぬ然らぬとあ
るまより秀吉もとんうとあく高倉山の陣所へ歸
つてい上月より山中う壻の亀井新十郎ひそ

小鹿助の使として来る秀吉ひそく新十郎み中
 ける様信長より急み三木を攻むる由下知あるよ
 よう我等も當表を引拂ひ彼處へ向ふべきあり我
 等當表を引拂むる西川の勢急に城を攻めしめし
 然らぬ城忽ち落勝久よも生害あるべく鹿助も討
 死せらるらん此事いうも残念あり因て明朝早
 天小城中の面々討て出敵陣は向ひあふべし然し
 某もまゝ同く打て掛る亂軍の内小勝久兄弟并
 小鹿助等を一纏ひ引取り此策を能々舅殿へ
 も通達ありて手筈を違へかふると約束してを返
 しける

尾子勝久山中立原の上月籠城めと織田家のた
 め小境を守らんとすあはるびその地美作は近く
 出雲小通をるは便利を以て強て請て此は居し
 ろといひ筑前守をめし是を満うとを以然と
 といへとも是を援とさといひ又味方とありし新
 附ののの心を傷る因て援を遠く請て其味方
 のため小謀ることの厚さと鳴を今あはと推度を
 らふ其本心勝久とすし幸盛の上月と請とを嫌
 こととさうし故あり然るを此記の作者あは知を
 多言を費して益其實は遠さめることを致を讀め
 の丁寧反復とい自然小其情を得べし

山中幸盛忠肝義膽の事

并上月表諸軍退陣の事

亀井新十郎城中に忍ひ返り筑前守のやと一通り
 鹿助はあさう明朝早天ふ切出人用意とあさうや
 と勧めけるふ鹿助大に驚き信長出馬あく秀吉と
 一め高倉山に在処の加勢あつく三木の城へ向
 ふう為に此表を引退くとや抑當城に筑前守破却
 して捨んと云くと某請受尼子方の兵士らうりふ
 て籠城しつるい今日秀吉う援をうけましとあめ
 ひ一故あり秀吉もまゝ眞實に我等を援らんとお
 のまゝ籠城のら一めは一二人腹心の者と差加へ

さあり然るを突らあして尼子衆らうりに城を任
 としはててや筑前守の心と知たるを然るふ
 其身此表を引拂ふと云期に臨で我等を援ひ出ん
 とらあほうふ虚々しと云条うか此城に籠るの
 侍も大将も下部も誰う尼子重恩の者ありさる
 死の一處に死て死手三途を共にと契うしのか
 ふみ大将と幸盛らうりを援ひ取んとハ勇士の本
 意と知さるの心とや秀吉左様の理に迷ふべ
 さののあうび然るふ此表の陣を引拂ふ辭のあさ
 まゝ其方を欺さてさのいひし誠は秀吉我々を
 援らんとおめらる秀吉の勢らうりあて早く到着

と一時直ニ策もあつらん高倉山の峯の
不夜の遠くを焼ひる人も知たる五色の吹
貫瓢箪の馬印を押立く景氣をうの加勢を示し
終ニ一度も毛利の陣ニ向て軍を仕うけしとあ
吹貫や馬印をうらとて以て中國武士を怖さんとお
のひひるや狐狸の鳴弦ニ震恐ふ如く江越の侍中
の落もやいほらん両川もささうふ老将をうそれ
あとのことはい知たるへしとのち加勢の人數追
追下著し休まぬ見へあうら敵ニ掛あつとをばうし
を以て除我々のためふ出陣あうしぬあうぬうし
をい知川る之然るふ両川の人々も筑前守を敵と

あつて軍をばらばら織田家と仇を結ひてんと
と憚りあつて彼方うもあつらひあうし之然
るふ両川の出陣全く當手の者と死生を諍らんう為
あるとや然るふ筑前守此表引取んふ味方の勢を
捨殺ししといらうとを思ひとあつて其方
と甘くそらうと之幸盛りうふ拙しとも只一人城
を逃し出逃し課をとりて生捕をあつて末代まで
耻辱あつ此城よりあつし初より毛利勢を引請て
軍とんといあつての覺悟あつ去とて秀吉の然い
らうと何とて返辭とびの臆とつといととんを
口惜うあへし今一度秀吉の陣へ行て御芳志の段

深く喜び入ては但幸盛當城は籠る時や死あら
此城と思ひ定め元より御加勢をやりしともあ
ゆへとも厚く御情入を以て大軍を引率し爰許へ
御下着返るく辱く存は然るふ安土より仰らるる
旨あるは因て各爰許引拂るをむふ故に勝久井ふ
某切て出ゆる御手合ありて我々を御引取被下
ゆらんとの御旨の深さと悦ひふ堪む去あり
一城の士卒皆尼子重恩の者よ何と何と見分
たくゆへは我々城中よ腹を切士卒の命を助け
中へくと決定仕うは間各く御心の儘に御引取
ゆへと中を帰とやとて出しけるふ亀井秀吉の

陣ふ来り鹿助うちとに告て立歸とい秀吉
も又ゆふと辭あく信忠ふ告て加勢を猶少々も
残さるはさやあ謀るに信忠あを許さるを
秀吉も力及ては然ら高倉山と引取べさるを
ゆへ兩川の衆此方の引退くと付慕らぬといある
へゆへは如何よと無事ふ引取とを得べけん
評定しけるは秀吉惟住五郎左衛門尉長秀を招て
中けるは此大軍の思慮あく引掛たりは兩川の先
鋒ありは慕ひ来りある因て某あめは今夜陣
陣ふ火の光と盛は焚けけ兵糧支度の体は明日
朝ゆけふ敵陣へ取めらる如くをア然とい敵

陣もてもあると待へる用意とありて打て出んと
ちあそくあつて夜のみまも明果ぬうち一
勢一勢手もやに引取りへし此謀ゆるあつんと
中けし惟住五郎左衛門尉尤然るへしと同心し
ひるあつて秀吉然らぬ御邊の思付し様も佐
久間瀧川も計とありとやとて長秀も何さよ
貴邊の計策といへて彼衆例の嫉妬偏執の心より
よりし謀も行へし然らぬ其意もやうとて
んとて長秀夫より佐久間瀧川安藤の陣もいさう
退口の方便をやりし何も然るべしとて陣々
て火を焚兵糧の用意とるさうあつたりけり秀吉

の本陣もて明日の中國衆の陣へ切入へしめ
きてあつてよくとよあといひける敵うへ
漏れぬとの謀あり中國衆の陣中も織田方
の陣々も終夜火の手の盛ある兵糧の支度ある
をさそし明日寄來るとし防戦の用
意とへしとむめくらち織田方の諸將は佐久
間瀧川一手もあつて三ヶ月山へ引揚て諸勢をま
川二番も氏家安藤筒井三番信雄信孝との次も惟
住五郎左衛門尉齋藤彌平兵衛尉蜂谷兵庫頭稻葉
右京亮五番も長岡兵部大輔父子三人其外諸勢段
段も引取りめも西川の士共も口惜敵も欺りし

しう去ハ跡を追て打留ムヤと俄ニこえら立とも
とや遠く引退て羽柴筑前守も跡へ引下り
一万餘人と三ツヨリて操引ニ難あく書寫山へ
ろを退たうけ也

上月の退口一説ヨラ毛利方吉川元長二万餘騎
よて高倉山のうしう廻りを見て信忠驚ら書
寫山へ逃歸るといひ又一説ヨラ信忠鎧摩津陣
して上月表へ至らばといひあるひら秀吉高倉
山ニ陣をとりふりまこそ是をいらは

重修真書太閤記五編卷之拾六

重修真書太閤記五編卷之拾七

勝久幸盛自害上月落城の事

并筑前守惜幸盛死事

去程ニ上月表加勢とて下着る上方勢皆く引
退げどハ城中の輩ゆて覺悟の上あり流石心
細くねのふも有へ山中鹿助幸盛ハ籠城の初ニ
う思ひ設けしことありて少も恐と悲愁ハ大將
尼子左衛門尉勝久ニ向ひ某富田開城の後漂泊流
浪と種々の辛苦を凌さゆて全く尼子再興の志願
と達ちん為ふハ共今ハ弓折運盡て道

らやうあく成行ゆと戦の拙さ故ふいへる御家再
興の志願叶やまると業盡時と存ひ然者是す付
従ひひ輩忠義厚く二心ふら者あると戦場の烟と
あゝゆらんこと餘うふ痛らうくゆ因て寄手へ大将
と幸盛と二人腹切て彼等う命を請受やさらやと
存ひ恩賞を賜らるるまであをふけと一処に討死さ
とんこの大将の仁徳ふいへるに勧めしゆら勝久
莞尔と笑ひ夫あを勝久かこの年月心ふ掛し処か
早く寄手へや送るへとあうけるふら鹿助
使者と吉川の許へ遣らうゆささけるら籠城の兵
士のつとも運盡てゆへる切ら出あゆら程戦ひ

戦死仕るへさひてゆへとも何程切出戦ふとも益
あらうとあてゆふ雙方多く死傷ゆとさんと不便の
至ゆ因て大将勝久同弟助四郎通久とらゆ山中
鹿助神西三郎左衛門尉加藤彦四郎宗徒の者五人
切腹仕るへくゆ間残る処の雑兵等う命御助は下
ゆへとやをさうけと元春隆景も哀とを催ふ
面々自害あうて士卒の命を助けらまんとこのと大将
の心底感し入てゆ随分心静ま生害あまゆくゆ五
人衆の外ふ於て々弓矢神も照覧ゆへ聊も相違を
く助命をさうさゆと神文を以て返答あうけと
ら鹿助大悦ひ翌廿九日すの川諸士卒と段々退城

ぞめ其後檢使を賜らるるなりと望いけよハ吉川
 元春より香川兵部大夫春次小早川隆景より平賀
 太郎左衛門尉元佐を遣らるる香川平賀城中に
 入りし山中鹿助出迎ひ殷勤ふるとを請入主
 客の座定よりてのち大将尼子左衛門尉勝久同助
 四郎通久兄弟一時小腹と切りぬれ加藤彦四郎政
 貞久錯次神西三郎左衛門尉元道池田甚三郎
 久則加藤彦四郎等居並ひ見事小切腹したる
 ら鹿助始終よく見届勝久通久の首を帛に包み檢
 使の前より置幸盛中けり去永祿七年雲州富
 田落城一門即從散々退散し尼子家一旦断絶

小及ふ然も其生を貪り耻を忍ひ天地の間も
 踏踏し萍花浮浪の身にあらずも横目らつぬ小主
 家の廢趾を見り忍ひ木耳たすなり尼子の名
 字を聞とありて漸々小餘黨を集め断々殘類を
 催ふ勝久の東福寺に喝食休まりありける探
 索め終り隠州に入雲州に移りこの十餘年の間露
 小袖をぬき霜の枕の虫をぬき千辛万苦
 て今月今日まで二千の羸兵を以て貴國十萬小及
 ふ剛兵を引受六十餘日籠城し我等身取
 る十分の手柄と申す只天運至らば主家長く断
 絶とせんと怨むべきに似て怨むへうは憤る所あ

如くみて憤るべき所あり四大今散を五蘊皆
空と云ひて腹十文字を搔切てうの伏ふ伏てと死
したうげと幸盛行年四十五歳智謀うくく武勇
世ふ絶と一ののどとて香川も平賀も共々鎧の袖
をぬらうげと

山中幸盛天正六年七月六日備中國甲部川阿井
渡ふ於て天野中務少輔元明う家人河村新左衛
門福間彦右衛門う為に討る幸盛行年四十歳又
ち三十九歳とも云勝久の七月三日み行年廿六
歳
両檢使立歸り勝久兄弟の切腹の体ありといは神西

加藤う振舞山中鹿助う最期の容子ら名く語り
出しの吉川元春小早川隆景の両将も涙を流さ
し尼子主従の首備中松山の本陣み送る輝元の實
檢入とのち雲州み送る富田月山の城下尼子
家の菩提所ふ葬り誦經供養念頃み修行ありたう
げう然るも両川も上月の城を落し尼子勝久兄弟
ふ腹を切を其外宗徒の士五人の首を得しうと速
に上月表を引拂ひことも備中へ引返を又羽柴筑
前守秀吉の鎧磨の陣み至る大将の前み出てかけ
るの安土の御出馬延引とて返々不審に存ゆそ
の故に某大殿ふ仕奉るげると年久し其際鷹野ふ

大関五郎編卷一七

ヨ

あは河狩よあは仰出さとし時刻うらるやことい
 何度もあうて御供の衆間合さうしとて御勘當
 蒙りしものもあうさ矧御陣の事に於て幾日と
 御定めあうてい雨よても雪よても延しあふと一
 度もあうらる然るに中國衆ごころめその對陣ふ
 御下向のよ御觸あうて終に御下向ましゆさ
 如何ある思召あや秀吉更に其意を得奉らば是に
 何人う大殿御下向ましゆさば毛利衆と大合戦ふ
 及ふ愈しうらる尼子兄弟山中立原あは先鋒ふ加え
 うて軍さの毛利家うあうば敗走とべし毛利家一
 度敗走とる宇喜田吉見等ならまらふ降参とべし

左あうい別所波多野の類よて力を落し氣を疲う
 して中然ると御出馬と止め却て上月加勢を引
 揚尼子兄弟と捨殺しゆと全く毛利家ふ密に志を
 通しゆめの所業と存ゆその上山中ぎ一所ふ上
 月ふ籠うゆ二千餘人の内大将とも七人生害よて
 その餘は立退ゆへる能侍多く立のさしと思召さ
 ぶべし既し亀井新十郎う如さゆのそらゆゆの御
 旗下へい参うやましくゆあは侍多く捨さをお
 ふと惜御事あうそや是必讒者の所為よしくゆへ
 くゆへとも實ふ天下の為に大事と誤うあはと返
 るく遺恨よゆとゆけまは中将信忠らめて心付

惟任め安土へたてまつりて注進ふ止め奉りしあ
 りへるは但惟任り注進状ふ止め奉りしものこみあ
 らび始り信忠り安土を進發と一日大殿の仰ら
 りあり毛利三家の者如何に猛りとも朝憲を背り
 たらんより信長自身發向をべげとらも元春隆景
 也計らひあるべし輝元年くの貢獻急る事ありけむ
 其罪を鳴りてあを責むといふとあり尼子兄弟
 を朝家ふ勤勞あるふありは只その父祖の業と興
 さん孝志賞をへしと云とも抑りてくくふ國郡
 と剽掠し民庶の財と劫奪をくくことありと云べし
 此れ我容易ふ出馬ありあさ所以あり筑前ハ

此れとの事知さるぬのみあり去とて幕下みあ
 りぬの何も悉く朝家ふ勤勞あるぬのくくもあ
 らぬ打出して仰らるへさふもありは不可説の
 中みまふ不可説ありと宣をせしと仰らるし秀吉
 涙をあり此れとの事筑前知たらんと御説
 此を誠み畏入てあをゆへとて退出は
 信亮去鹿助忠り忠あり然ととも義ふ薄織田右府
 天下を征する朝家の公用を奉るは將軍の台命ふ應
 をさる者を討らるを以て名を北畠朝倉淺井
 の罪是あり三好を征するは將軍の仇を復する
 あり松永を討りし君とて臣と罰するあり毛

利の如き朝廷大儀の用途と獻しよる時々の
貢獻を闕とあり故に是を征とせざる名あり尼子
の如き朝廷に勤勞あく且鹿助の上月を守らん
ことを請やその本意上月に居て作州と蠶食し遂
に伯州を侵し雲州と復るふあり其意をてふ
織田家の為に忠を竭とべしと云ふありびまこ
らしめ惟任に屬とらんとし一に惟任を足ととをび
羽柴に屬とるに全く上月を請らん為也信長
筑前守共素より鹿助勇の勇之又忠也然とて
其本志始終織田家の為に用ひらんと難とて知
惟任に鹿助を諷とらぬも又光秀と嫌ふて秀吉に

つげらる然して筑前守の味方と捨殺との名と
疾む故に加勢と請又勞しそのち己の用たらさ
るゝと知故に力と戦ふ盡さば加勢の引取際ふ至
て將命の止を得ざるを以て名とばらんと秀吉の譎
みして正あつたる所以と知へし

神吉城落城の事

并脇坂甚内安治一番乗の事

左近中将信忠上月を破らんと尼子兄弟を殺されし
ことを耻とめて東播と平げ其過を補らんとやと思ひ
七月三日惣勢を以て神吉志形兩城をめぐむべし
と下知とらんと北畠信雄惟住五郎左衛門尉長秀佐

久間右衛門尉信盛以下一万餘騎の遊軍ありて
 四方城々々押たる神吉の城より城主神吉民部
 少輔ありひみ別所より手より梶原十右衛門尉季茂入道
 冬庵中村壹岐守小寺主馬助谷川權大夫藤田藤次
 柏原治部右衛門尉ありといへる究竟の輩と撰と遣
 ろ籠城をせしめ寄手雲霞の如しといへるとも
 少も恐と弓鉄炮を鳴るべうけ一同に切て放つ
 稻麻竹葦の如く打圍一中へ射出し放ち掛てこふ
 とい仇矢の更は無うけり寄手二三十人矢庭に討
 れて進み得と信忠いうつて新手と入替攻めしこと
 此城中嚴敷防をせしめあり羽柴筑前守近隣の竹

木と多く切とられを束ねて楯の板に替り川に連
 て攻めしとけし矢も是れ中を徹らさうけり西國
 よりて竹束といふものを知らしむる故不審あり
 て猶豫ありける処を見をまゝ近々と塀際まで押
 詰たり城主民部少輔ありて見て寄手攻支度して
 進きたといひ弓鉄炮より合んも無益あり去ハ
 打出戦へやとて百余騎を従へ城門を開き大波の
 打うへを如く関を揚め切て出て瀧川左近將監
 一益が一千餘騎を散々切負る民部より太刀ハ神
 吉重代備前福岡一文字則宗の作にして二尺九寸
 あうけるを電の如くひらめり堅横無尋も切て

廻る神吉元より打者取て達者ありその太刀前も
當るのの堅甲鐵鎖ともいふはあまひい真甲と切
破とあるひは腰車あるひは胴切との教知と神吉
民部少輔大音聲よてあまひを當城代々の主神吉治
時也東國よて名ある人々寄合て手並のわとを見
あへやといへとも彼ら勇猛敵しうととあひ
しよ近く寄るものもあううと教刻の戦も大
め討と治時う勢らつらふ二三十騎よあうし
あ城中ふ引返し自害さんこ引返しけるを寄手を
さ間あく追懸城を付入よせらやと搦立けるを見
て城中より梶原入道冬庵小寺主馬助中村壹岐守

長谷川權大夫等三百あまひよて切て出難あく神
吉と引入たう梶原入道大勇力の古兵よて當國無
雙と名を得しものあまひ五尺あまひの大長刀を
水車ふ廻し寄手と弓手馬手ふ引請馬武者三騎切
て落し二人ふ手と負とそのうち彼長刀をい下人
ふ持と大手と廣げんを廻う手ふ當る敵をいひ孤
んて投付く働さけるあまを寄手多く討とけり筑前
守ことと見て我手の若者此敵を追入よと下知し
けし加藤福島脇坂片桐堀尾槽屋平野の輩何う
あ少も猶豫とへさ槍を握て突立けるよと城兵大
ふ破と城門を入んとあしけるを羽柴う勢付入ふ

込のるべしとさあひあくるを見て城中より鉄炮
 をちらりと放ちうけあは羽柴う手の壯者そこ
 しひるんで見へける処へ脇坂甚内安治大音揚是
 まて責付て鉄炮を打ちへさうしことやある我も續
 けと呼らういり馳入ける鉄炮よそ膝口とうこと
 へ倒しとらうとも先の辭とやちたうけん起直う
 て無二無三も責めう外構を切破てらう入神
 吉の城の一番乗とあそふのうけし是を見て脇坂
 小川くけくと曳く聲を出し羽柴う勢共込入し
 ら城兵あうつれ本丸へ逃入てあうと先途と防さ
 けう然るも城將神吉治時う叔父も神吉藤大夫と

りふの寄手へ内通して甥の治時を欺さ首を取
 て降参しけしハ城兵の川ともあらえ討死し三
 木より加勢の兵士も大形討死とらうあり城の遠
 ぶ落たうけう信忠筑前守も下知しあふ様藤大夫
 の甥と切て降参とらう臆病不義の侍あり見あらし
 の為ふ首を刎べさのめあとも一旦降参とゆる
 とらうのめあし命とらうとを助くへしされとも
 武士の道とらうとらうのめあうとて甲冑をとらう取
 太刀刀を解と赤裸とあうて追放とらう
 一書ふ神吉民部少輔治時廿八九歳夕花緘の鎧
 著て冑をい童と持とらうと云織田譜より七月丹

羽荒木破神吉志方降とらゆ備前福岡一文字則
宗と云の後鳥羽院番鍛冶の一人あり元暦中の
人と云建保二年六十三歳よて没と云元暦
元年三十二歳あり梶原冬庵入道の大勢を打て
のち自害ととあり

あしより寄手志方の城へ押寄て攻けし城王櫛
橋左馬進一戦よも及こぬ城を渡して退去とあり
こよ於て神吉志方とも羽柴筑前守を請取人数を
あめ置守らととあり左中将信忠三木へ向へとも
城の要害堅固よて容易く攻落しうることと察
し諸將を集め種々評定ふるといへとも山高く峻

しげし開道より搦手へ攻入るともありあし
は八月月中旬頃信忠引返しその跡へ筑前守とを
向ひ三木の東ある平山の峯に陣を取西の方ふ
宮部善祥坊をさし置その次南へ向て脇坂甚内加
藤作内糟谷助右衛門尉と籠置用心嚴敷守とら
一書ふ信忠三木の城四面三里間を巡見し東
の方平山の峯に秀吉と置北に大村の上の城ふ
谷大膳西に東這田の上の城ふ宮部善祥坊を置
此向城と平山との間ふ二重堀を掛て通路をよ
くとりめ善祥坊ふ續けて脇坂加藤とさし置あ
れより四里へとて魚住とらふ処よ毛利援兵の寄來ら

大岡記五編卷之七

ん時の防らとあり置還う上あるとあり

重修真書太閤記五編卷之拾七

重修真書太閤記五編卷之拾八

荒木攝津守村重謀叛の事

并秀吉伴天連と説客とある事

荒木攝津守村重謀叛の由安土へ注進する者あり
一、共信長半の信半の疑ひ村重に限りて左様
に逆意と企る者みありは定て巷説よりあるべ
けと彼假一旦異心を懐くとも昔時大功を思へ
容易くあつと捨るみ悉を松井宮内卿友閑法印惟
任日向守萬見仙千代よさの計らひゆへと宣ひけ
る三人の者急ぎ摂州に馳下り上意の趣くつし

大岡記五編卷之八

く語りけしむ村重承らう從來我身安土ふ對し誤
うるしその上左様と思召るる条泰ある言葉ふ竭
さしこととてす川感涙と流しけるははらう三人とも
ふ攝州左程ふ仰らむい安土よて何の別儀うあそ
しほそへさ急さ安土へ御越あうて直に仰とけり
と然るべしこやと各安堵の思とあり安土へ帰り
斯と言上とてのち信長も顔色和悦見へけり
さそ有へしと仰出されけるふ因て三人共は面目
と施して退出を摂津守村重に安土より上使と下
され御懇の御意と蒙りけりとい參上して御機嫌を
伺ひ巷説の身は覺ある由と陳謝とせむとありひ

嫡子新五郎と伴ひ天正六年十月廿三日在岡の城
と打立同國山崎ふ着たりけり

攝州河邊郡在岡又絲海伊丹と去京より山崎ま
て四里半山崎より攝州島上郡高槻それより島
下郡茨木郡山豊島郡瀬川の宿とせよ伊丹あり

然るに又讒者あうて上聞をゆをゆけるふあり村
重害なあるんとを恐る中途より引返し全く別心
の色を顯しけり信長聞食村重に智勇の侍あり
在國に攝州の要地あり毛利別所波多野等と牒し
合をある播丹の二州と共に敵地とあるべし等閑

ふろ置のこゝ早く攝州へ進發ありしとて十一月三日上洛二条に逗留す。ゆゑ二度使者と差下さし様く小宥めありと云とも村重をてふ籠城決着し軍勢催促の上あり今更違變及ひひのこしとて返答あり及こゝ信長あり此上ハ力あり早早征伐ありしとて同月九日京都を立とあり攝州へ趣こそとて手配りありまの瀧川左近將監一益惟任日向守光秀惟任五郎左衛門尉長秀蜂谷兵庫頭稻葉右京亮氏家左京亮安藤伊賀守等より茂川糟塚太田村の邊に陣を取と又茨木より向ひ砦を築くと信長の本陣ハ天野山信忠ハ天神山に陣を

取羽柴筑前守秀吉ハ攝州よりありける。荒木謀叛の事と聞三木の押とて平山より竹中半兵衛尉淺野彌兵衛尉と大將とあり兵士ありて相添西方南方へのこのまゝ宮部善祥坊加藤作内脇坂甚内等より守らせ置秀吉自身三千餘人を率し摂州に馳上り荒木退治の評定は加らりける。高槻の城主高山右近大夫長房ハ村重と斷金の交厚けし。弟一の味方たるうへその勇猛ありしとて世に勝とて然り右近とて是を説しむべし。其上村重の謀叛もまゝあらば其本心ありあるまじく村重の勇まゝとて智謀あるを忌者ありとて讒言をめす。

故あらん然り如何もして村重心得んことをや
と思ひけるはあついろくと探索めし村重一
族とて自家の子即從信長の仁あり信あり表裏反
復の心底を知り故に一旦和睦とてのひ出仕する
ことも長く續くべきにありは後日の害を思はる一
圖よあつひ定めしあつといふあつ秀吉この高
山を語らんとと思ひ付し但高槻の高山右近荒木
め為し龍城しける警衛堅固し城門の出入
を禁し嚴敷しとと沙汰しけるあつ誰人として
うまの右近よ説しめんと肝膽を摧さける処幸の
便宜と得たりとと如何よと尋ねるよその頃南

蠻より耶蘇といふの來りけるうちよ又伴天連
といふの諸國を徘徊しいろく奇怪の術をあし
諸人と迷ひ宗門よ歸入しめんととてころりけ
るか無智無才の民百姓その奇怪を見て此宗旨と
尊崇するもの數多ありけるうちよいりり郡主
城主國人歴々多く歸伏ありあつらいつり信長
も此由を聞食あり信仰の御氣色ありけり
を安土もこの伴天連多く入込たり羽柴筑前守
の宗門と嫌ひ度く信長よ諫めを入し共信長
更に入し我あるめち此宗門を信仰する
ふあつばめくふ亂の世の中あり何あることあり

用立折もあるべしと思召て此宗門を近付置あり
と宣ひいけい筑前守も感伏し何様ふも高智の大
将うふと舌を振ふと感いけう右近といこの伴天
連の來朝をいめよう信仰していことを尊崇か
しけい秀吉とい究竟のいありといふ安土
に在ける伴天連を一人呼寄高山右近う許へ使者
に遣らういめやうい説とあら早速に歸伏仕るべ
しといけい信長即刻彼伴天連を召出さとい右近
の許へ行向ひ斯々中て味方あるとい此事成就
とい伴天連の弘むる宗門と日本に立あうとい
り又此事成就とい伴天連一人も日本に立置

ふまとい仰付らといめら伴天連のいこまの上
意に隨ひ高槻城に行けるい兼々信仰の伴天連の
事あり疑ふべといありとい門の内へ入けい
伴天連城中へ入信長とい筑前守の口状を述べ
い右近熟といと聞荒木といいともめくを使
者の口状に従て降参とい我信仰の宗門長く日
本に絶んとい傷に降参の意頗うい盛るとい村
重と捨て我身一人信長に降らとい不實不信の武士
といとい人とい口惜めい如何ありとい村
重とも助けい宗門をも滅らとい工夫あるべ
し但即答ふ及いめい近日の内にとてい伴天連

とめへけいどの伴天連信長の本陣へめへう右近
う返辭と言上しける筑前守御めさうらふ在てお
とと聞伴天連ともひ近付汝今一度高槻へ行向ふ
べーその時某と同道して行へーと約束しけい
伴天連めーこまうをさうら筑前守と伴ひ高槻城
中ふ趣さびるふ高山右近出向ひ筑前守を客座ふ
請して對面したうけり其時筑前守右近ふ向ひ中
げり村重何の故ふ謀叛とや定めて諛者の舌
頭と恐とてあるへー假令村重勇智絶倫ありとも
今在岡城ふ籠り信長と敵とありて開運の期ある
へさにあうびそと知さる村重ありはとも淮陰

侯の虜とありしむうーと思ひて期籠城を企て花
花敷一戦して討死と思切ふあへーさしと
を然らんふの謀叛人と定り死後ふ汚名を傳ふ
へー何程う残念ならそや某多年村重と懇志の中
ふどの種々と勘辨するふ安土ふても村重り智勇
世ふ勝と惜すをあふとの限うあけはとも天
下の政道と正を御身あり上意は従ふ引籠り居
あふののを打捨あへさしにありは依て止を得を
出馬あふ及ひ川るあり本人の村重とさふ真ふ憎
しと思さぬののをさし御邊ふと何とて深く
悪敷あがさるへさ早く荒木一味の小義小勇とひ

ふあへ「荒木とも中宿め面々を安穩たらん大義
大勇と行ひあふべし其為よ秀吉の如く追伺公と
依て秀吉と共に信長の本陣に至りて中譯らるし
秀吉よ御身の為よありて取合て申へ村重
この秀吉と御邊と二人して能々中披うん元
う深く憎まるとあらぬ荒木うとあり速に疑團とけ
て始の如く平坦よりありぬへし信長元より急速に
征伐ありあふべし意あり早々本陣へ御参ありて
心中と明らるへし極々悪しとおありめさし人
人こそその人よとよ信伏し奉らば何の子細も
し稻葉一鉄と見あふへし只今村重と約定さし

こと守り給ふて殿の召あふと背をらとあらぬ荒木
あ為よもあるよしとあらぬ武士の身の子孫のそ大
事あり我身とてそその子孫の長く相續あらん
この哀の中の悦ひあり只今の体よその身の
このかの子孫よと断絶よ及ふへし能々思慮ある處
さありと説きて右近忽に疑氷と晴し筑州のゆを
あり處一々理に當て覺えん然に御本陣へ参上仕
るへさしては御前の首尾萬端より頼とたて
あつるといふより秀吉即右近と同道し天野山
の陣処へ至りてこの始末を言上し信長も
満足と思召し直に右近とゆし出さし参上神妙の

とあり上とら御別心ありとらとを只今迄の通り本
領を安堵し忠義を竭しゆくと仰出さしめり右
近もろゝめて秀吉の辞の偽ありぬことを信しよん
頼りし侍うあと深くたのまありひしとぞ

一書あ村重既と在岡を發し山崎あ至うと家
臣荒木志磨守同平大夫中川瀬兵衛池田久左衛
門藤井加賀守高山右近將監河原林越後守一向
小歸城と勧め輝元へ一味然るべし信長あ豺狼
の如き大将あて其怒あ觸あひのの安堵仕あひら
承あろ及あるあひとあけるあ処へ村重あ安土あの屋
敷あと守あり居あけるあ管惣兵衛尉馳あ來あり村重あの謀叛

明白あああの爰許者あああん時捕あてとあ評定ああ
とあ由あと注進あ然あるあ処へ惟任あり許ありあも御前
以あの外あは御參勤あはあるあも安穩あ御歸城あ覺
東あああと早打あを以て告あげあるあもあ村重あ山崎あ
う引返あをあといあふ村重あ今年あ三十二歳あ惟任あ光秀あ五
十一歳あ也

高山右近大夫招中川瀬兵衛尉事

并中川清秀誘安部仁右衛門事

爰あ攝州あ茨木あの城主あ中川瀬兵衛尉清秀あ荒木村
重あ親類あとて無あ二あの味方あありあけるあり村重あ籠城あの

企を聞るは自滅と求る基あり然るべうは早く
安土へ参候し諛者と正こといへしと諫めしめを
村重山崎より來りけるふ菅惣兵衛り注進み驚さ
村重直に引歸しけるまらう清秀もまゝ大不審
しこと諛者の所為あるへし然しあり能々穿鑿
して村重り為るると中披りんと羽柴筑前守み
相談し村重はこましく異見ありしめとも同姓の一
族等信長の表裏反覆不信ふること知り一旦思免
と蒙り出仕するとも遂に穩やうあるまゝとして籠
城の評定は決り由返答とらう清秀も力及こ
は荒木一家の滅亡はつる時節到來とらうと歎息し

同 籠城ありたりけり

中川清秀今年三十八歳荒木村重の母は中川佐
渡守重清の女にて清秀叔母あり
筑前守めめて清秀り力量ありて武勇人ふとて
しことを喜ひ何卒この者と招りんと様々み利解と
盡しけりとも清秀と荒木は父の甥めて我從弟を
り見放めしこと秀吉の招に應と居城茨木
み籠ありし村重より石田伊豫守渡邊勘大夫兩
人と加勢とらうて差越とら秀吉この事と聞弥中川
り小信と守りて大義と失れををりける折あり
高山右近大夫降参とらうの善便宜と得たりとて

九
フ月言ユ多老一ノ
聽きて高山たかやまと呼よ寄茨木よきあきの中川なかつがわ瀬兵衛尉せへいゑい荒木あらかと一味いらい
して籠城ろうじやうを親族しんぞくの事ことあはれ見放みはな川がわまゝと云いを
理ことあはれとも只今ただいま村重むらむねと一処いっしょ討死うちじして何なんの詮せんり
ある早く信長のぶながの陣頭じんづうへ参上まゐりあがり定め御悦ごえつひあ
うて本領ほんりやうと安堵あんとし且御前ごぜんの首尾くびびのありらん時ときは
村重むらむね誤あやまりふさ音ねと中なかつ披ひりわ共とも黄泉よみの道連みちづれとふ
うしに何程なんぢやうう勝かちとらとおのころとを此理このことを
清秀きよひでま中なかつさん人御身ひとごみあうてはあさすこ一族いっぞく
の為ためと云先祖せんぞへの孝行かうかうあり骨折ほねをりむくやと勸すすめし
めち高山たかやま一義いっぎまも及およむ承伏やうふくし茨木あきの城しろへ趣おもむき
けり

清秀きよひでの祖父そふふ高山たかやま佐渡守重清さだのしむねきよの武藏國住人むさしのくにぢゆうじん村岡
五郎良文ごろうりやうぶんの裔孫えいそん高山たかやま三郎重遠さぶろうしむねとほの孫まごあり撰津源
氏うぢ中川なかつがわ左衛門尉さゑもんゑい某なにかの女めづめと嫁よめと終つひに中川なかつがわと改あらた
めしあはれ右近うぢぢん大夫たいふと清秀きよひでとすこ一族いっぞくあり
清秀きよひで右近うぢぢん大夫たいふと呼よ入御邊いりごへん織田殿おだのどのの御陣ごじんへ参上まゐりあが
して本領ほんりやうと安堵あんとと聞然きこえ今いま敵味方たかひあり何
の所用しよようありて入來いりきありしや不審ふしん也なりといへる右近
中なかつける様某織田家やまのたけへ参上まゐりあがり村重むらむねを為ためと深く
あめふり故也ゆゑなりたとへ織田殿おだのどのの傍かたはらは荒木あらかの一族
多く同族どうぞくして朝夕あさゆふ忠ちゆうと盡つひし然後しかるに村重むらむね誤あやまりふさ
音ねと連々つらつら中なかつさん何とて御心ごこころの解とささむとぬこと

大朝臣五編卷一八

のあるへと必竟諛者の時を得し荒木一類の
の御前ありぬり故ある某近日織田殿の本陣
へ参上し種々ありし川邊の御免と追ひあけ
とも在岡へ御勢を向らるる今日追延引と
して思ひあふへ御邊もまの某と一所織田殿
の陣中へ御参り在て共々撰津守り誤る由を
中たひひあひ終る御免の沙汰ふ及ふ村重
織田殿を怨むること何の根も葉もあさく只中
間の諛者ありと縲あとの爰ふ及ひ一族親
類織田殿又暱近してあふ左様の諛言何と
あるへとや御邊の織田殿も筑前守もふたのめ

しく思召人あり早く御参りゆへその上織田殿の
御前より筑前守ありに取持ゆへ相違あ
ふへうらむと勧めに清秀元より和平を好
むる処ある神速を得心か何様さもあるへ
然に御邊と共々織田殿御陣へ参上をへ然る
め在岡より加勢ふ来り石田渡邊兩人を返し
そのち速に御陣へ参るへ約束して高山を
返しそのち石田渡邊も高山より中より并筑
前守の口状と示し此旨村重ありせゆへと在岡
へめへその後中川從者十餘人より羽柴
か許へ来りめち秀吉大に悦び急ぎ對面し直に

本陣へ同道し織田殿の見参入奉る織田殿大ふ
悦むをむひ参上神妙の至也本領相違あるへうらひ
ゆつ村重あも御別義あり早々出仕ひへ不審ふ
思召の事直又中上ゆく聞食直さるべし此旨
遣しひへと仰出さるるを清秀まもく筑前
守の中をうとを信し高山と共に村重を勧めて出
仕さむつけれともをせしむ以前ふ大矢田の安
部仁右衛門とあさらひ織田殿へ参上さるむべし
然とあさる清秀の功あるべしとおめひしによう
中川大矢田に至り理解をのべしむと仁右衛門
も村重のためと聞てちとも擬議を以瀬兵衛と

ゆふ打つして秀吉の陣処に來うけしは秀吉厚く
をてなうさる本陣へ伺公し織田殿の御機嫌をう
あふふ仁右衛門と御前へ召出さる御太刀御馬
あと下さるるを仁右衛門もゆゆとおめひ
しは織田殿の御氣色うかど心中ふ
く感伏しいうふをて村重と勧め無事と取扱
やとおめひこそ種々工夫とあしたうけ
大矢田の大坂伊丹尼崎三処へ通路ありし處
あれは村重う方までも大事の処あり因て筑前
守謀て味方ののとなをせしむ御帰陣あるべし
然るふ今年暮る及ひしゆまの御帰陣あるべし

二月己丑編次十八

二

とて兵庫花熊須磨一谷邊と放火ありしひその
ち諸將とて本陣へめさしり
兵庫花熊一谷の尼崎より西七八里ふ及

重修真書太閤記五編卷之十八終

